

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 滑川市立滑川中学校・教諭・砂田 和美
- 2 研修期間 平成30年9月17日(月)～平成30年9月24日(月) 8日間
- 3 調査研修課題 海外諸国の教育、芸術、歴史、文化や社会事情等の調査研究
- 4 研修機関等 アメリカ合衆国
シアトル : 在シアトル日本国総領事館
ビーコンヒルインターナショナル小学校
ジョンスタンフォードインターナショナル小学校
サンフランシスコ : 榎本博之氏(シリコバレージャパソニエバ-シティ発起人) 講義
ダニエル=オキモト氏(スタンフォード大学名誉教授) 講義
サンリアンドロ高校
エミリー=村瀬氏(サンフランシスコ女性地位推進局長) 訪問

5 研修の概要

(1) シアトルの学校(訪問先にて)

① ビーコンヒルインターナショナル小学校

ビーコンヒル小学校はシアトルの南部に位置している。同校の児童数は463名で教員は30名。人種構成としてはアジア太平洋系、ヒスパニックが35%ずつ、白人が13%、アフリカ系アメリカ人が10%等となっている。この小学校では、英語が第一言語ではない児童が多いため、「バイリンガル教育プログラム」を採用している。これは、午前中は英語で読書や算数等の教科の授業を受け、午後からは第一言語(中国語、スペイン語)で教科の授業を受けるというシステムで、児童全体の43%が受講している。また、家庭の収入によって学校での食事が無料となったり減額となったりするミールプランを受けている児童が全体の半数以上となっているところから、経済状況が少し厳しい家庭で育てている児童が多く通う小学校である。

教室には壁がなく、1つの空間に3つのクラスが入っている。各クラスの前半分のスペースは児童みんなで討論することができるようにカーペットが敷いてある。机は後ろ半分にグループ学習ができる形で配置されており、授業の前半は教室の前半分のスペースを使って討論形式で進め、後半で机に移動して書いたり読んだりする作業ができる。読み書きの作業は個の能力に応じて与えられる課題が違う。また、筆記用具は箱に入れられて置いてあるので、日本のように個人持ちの筆記用具で遊ぶことで集中力がそがれるということはない。そして、移動教室の時はクラス全員で並んで移動するなど、規律はある程度整えられている。一方でトイレのための途中退出や入場は自由で、戻ってきたら集中して授業を受けている姿が見られるのだが、気のせいかな学年が進むにつれて全体的に雑然とした雰囲気を感じられた。だが、保護者の手厚い協力体制ができており、どの授業にもボランティアの保護者がT2、T3として授業に入っている。

② ジョンスタンフォードインターナショナル小学校

シアトル州ウォリントンフォードにある小学校で児童数は約450名である。この小学校では、スペイン語と日本語でのイマージョンプログラムを提供している。イマージョンプログラムとは、外国語で異なる科目を履修するやり方である。授業の半分を英語、もう半分をスペイン語または日本語で受講する。日本語イマージョンプログラムの場合、日本語で、算数、理科、社会等を勉強する。小学校5年生の日本語で行う算数を参観させていただいた。九九を使ってゲームをする活動に私たちも加えてもらったのだが、児童が私たちにゲームの説明を日本語で教え、ともにゲームをすることで、日本語力と算数で培いたい論理的思考力の両方が高められていたように思う。この学校の児童のほとんどは第一言語が英語であるため、日本語やスペイン語の学習は自分の教養を高めるために受講しているケースが多いという。



(在シアトル日本国総領事館にて)

また、STEM教育として、プログラミングやコンピュータを使用した授業を入れている。Pre-schoolクラス(日本で言うと幼稚園)ですでにプログラムで動くロボットを操作する授業が導入されていた。その材料や資源を手に入れるための資金繰りに頭を悩ませておられるそうだ。

(2) エミリー=村瀬氏のお話

シティーホール内の会議室にて、サンフランシスコの教育事情について話を伺った。寄付文化が発達しているアメリカでは、学校の設備投入の一部を寄付で賄っているそうだ。今回訪問させていただいた3つの学校も、州と校種が違っていたのではっきりとは分からないが、入っている教育設備に差があるという印象を受けた。アメリカの格差社会を少しだけ垣間見た気がした。

(3) ダニエル=オキモト氏の講義

日系2世のオキモト氏のご両親が日本からアメリカに移住されてから、第二次世界大戦中の日系人に対する強制収容所の生活や、数々の苦勞の末、とても平穩な生活を過ごしておられる普段の生活の様子について話を伺った。特に、金銭的な理由で自分の大学行きを弟のオキモト氏に譲り、年月が経ってから3人の子供を育てながら大学、そして大学院で勉強をされたオキモト氏のお姉様の話には、差別や困難にも負けず、自分の夢を実現する日系人の力強さを感じた。



(サンリアンドロ高校にて)

(5) 教育事情視察を終えて

海外の学校の様子を見たり、説明を聞いたり、教育関係施設以外にも観光地を回りながら海外の文化に触れたりできたことは、私にとって、大変貴重な体験となった。また、普段接することのない異校種の先生方や富山経済同友会の方とのつながりをもつことができたり、貴重なお話を伺うことができたりもした。そして現地でも、小林氏、榎本氏、ダニエル氏、エミリー氏との触れ合いや貴重な話を伺うことで、それぞれの人間力の大きさを目の当たりにした。これまでは県内の少数の学校しか訪問したことがなく、人との交流の幅も狭かった私にとって、この研修で自分の考えや視野を広げることができたように思う。

例えばシアトルで訪問した小学校では、言語教育が大変充実していると感じた。日本語で算数の授業を受けていた児童に聞いたところ、家の中で話している言語は父が英語で母が日本語、そして自分は英語なのだそうである。まさに多民族国家・アメリカを象徴しているかのようであった。現在の日本国内では、国際化が進んでいる。海外からの旅行者だけでなく、労働者や移住者を受け入れていく日はそう遠くないともいわれている。今後は日本でも、アメリカで行われているような言語教育は必要となってくるであろう。

また、観光地ということもあるのだろうが、アメリカの人の挨拶が印象に残っている。「挨拶をさせられている」のではなく、心のこもった挨拶をしてくれるので、私も下手な英語ながら一生懸命に返そうと思えた。挨拶の大切さを改めて感じる事ができた。

そしてアメリカは、コミュニケーション能力やリーダーシップを育てる教育を授業の端々で取り入れていることも印象に残っている。教室のレイアウトにしても、話し合いをしやすいスペースが確保してある小学校があった。将来、AIに取って代わられる仕事が多いと聞く。私たち人間に残された仕事は統率を必要とするものや、クリエイティブなものだけであろうと予測されている。これからの教育には、基礎的な知識という土台の上に、人間力と思考力、判断力、表現力の育成がますます必要になってくると考える。

しかし、研修のなかで日本の教育のよさを再認識したり、日本も負けていないと感じたりすることもあった。海外と日本の文化の違いがあるように、教育制度の違いがあっても当然なので、日本の文化の中でアメリカが実践している教育と同じことが実施できるかは疑問である。これからの教育は、社会事情や他国の教育方針のよい所を取り入れながら、統制のとれた日本の教育や文化を大切に、互いに認め合い、学び合うことで課題解決学習を行っていくなどの「ニュー日本型教育」の在り方を模索していく必要があるのではないかと感じた。

今回訪問した学校の教員の皆さんは、自分の学校の教育に誇りと自信をもっているように感じられた。私も富山県の教育や富山県の未来を担う生徒たちのために、誇りと自信をもってこれからの教育活動を行っていきたいと思う。今回の教育事情視察の中で見たこと、感じたことを決して忘れず、この貴重な経験を生かしながら、これからも邁進していこうという思いを強くした。

このような機会を与えてくださった富山県教育委員会並びに富山経済同友会の皆様にこの場を借りて深く感謝申し上げたい。